

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄 「暁」	14
一首評 「そらよみ」	18
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	20
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	22
次回予告・編集後記	23

UTASORA
2024.
November

No. 23

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

自然の驚異

石川順一

Daylilly

井倉りつ

ワスレグサ きつと未来デパートに並ぶはすゞく売れると思つ
待たないと決めた夜からさみしこと思わなくなる夜を待つて
見えないしさわれないけむ「注ぐ」つて言うから液体なのかな愛つて
喚きたい「愛してよ」つてアクセルを全力で踏む 誰も見てない
死にたさと死にたくなさむ ムカデつて前にしか進めないんだつてさ
ほうじ茶のジエリコ煙草の味がする みんなにかの生まれ変わりだ
ワスレグサ あの人にだけ効くとこ 泣き顔も可愛かつたと言つて
薄い胸細い脚浮き出た背骨ぜんぶわたしがおぼえておくから

扇風機羽根を外され清められ元に戻されタオル掛けられ
伐採の宣言モツコウバラは今アブとテントウムシを抱えて
アブは今新芽に着陸黒き腹黄色き縞に薄日を浴びせ
模様無きテントウムシが新芽に居る黒き背中に何ができるか
晩秋にマリーゴーランド増えて行きアマリリス咲かぬ夏を想起す
赤き実がクロガネモチを覆う時木に括られし犬が吠え出す
藤の木は半分は駄目になるものだ土曜に喫茶店に行くと知るるルコウソウが泡立ち草に代わり行く水路に素早く動く小魚

歌島孟	@Sinn1990	多香子	松本直哉
片羽雲雀	@anju92091554	千原こはれ	@anju92091554
涸れ井戸	@kareido1111	こまくさ	@kohagi_tw
河岸景都	@kate_kawagishi	内藤ひづ	@croissant_hey_z
れもねねねねね	@Oyukimagine	深繫口上へ	@cotoha_mikage
君村類	@kmrr_r09	みなみ	@minama6481
香子	@kyoko_shogi	南の島	@_nkmmmm
久保田毒虫	@dokumu44	夏野ネコ	@natsuneko2000
麻倉ゆえ	@AsakuraYue	水や	@m_iya_o
有村桔梗	@chattenoire_k	袴田朱夏	@hakamada_shuka
井倉りつ	@uta_litz	久保田毒虫	@mushitake
石川順一	@Hitter57	久保田毒虫	@mushitake
入谷聰	@irritantis	桜やくわ	@Koharu_kura
宇井マナナ	@kijousan	くわいたけ	@naito_raku
泳一	@Shinsyutu2020	澤田悠生	@nakamada_shuka
井倉りつ	@Eishimada	西鎮	@dokumu44
寿司田都子	@sumitudou16	西鎮	@dokumu44
hs	@hs welt	澤田悠生	@dokumu44
柳椎柳	@kashiyanagi	月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	@dokumu44
		平本文	@dokumu44
		古井 朔	@dokumu44
		西鎮	@dokumu44
		澤田悠生	@dokumu44
		月立耀	@dokumu44
		ひなね	@dokumu44
		福山桃歌	

あめふらし海岸線で干からびて祈りは波に返されている
笑つてはいけないような気がしたのあなたが海を見て話すとき

シオマネキ涙をすべて呼び寄せてあなたを溺れさせる満潮
ヤドカリが捨てていったか巻貝は海水ばかりを抱えて沈む
砂浜に貝殻片方だけが落ち永遠に離れてしまった伴侶

荒波もかつては蒼い風だった手と手が触れて立ったさざなみ
潮だまり急にしゃがんだ子の影を蟹の親子が逃げ出していく
海岸に築きかけのまま残されて風がけずつていく砂の城

飲み込んだ声があふれた百日紅やさしく強くきれいでいたい

晩鐘が職員室を取り囲みもう一度ひまわりを抱きたい

シユーゲイザー聴いてるヘッドホン重くあなたはいつまでも夜のまま
夏がいた分だけ部屋が広くなり小さな声で二度呼んでみる

河川敷ひと駆歩く新しい靴少しだけでもいい匂い

僕の死後僕たちは海に出かけてあのサングラスをなくして帰る
手をつなぐことは約束ではなくて今は真夏の顔もおぼろげ

帰り道川沿いの公園に立ち寄ってあなたの熱を思い浮かべて

屋上模部23

宇祖田都子

屋上のフェンスを抜けてくるバスの静脈透けて見える夕暮れ
屋上にあるバス停に来るバスを待つ人の傘みな同じ傘
屋上はバスに乗るひとばかりいて世界も同じ虹だと聞いた
バス停の時間は錆びてさび付いた傘をさす例え夢などを
あのバスは虹と同じで人間も時計通りの運行をする
降りかかる不快なものを防ぐためバス停はみならせん階段
路線図の消えてしまったバスが来てただ一人だけ降り立つ螺旋
屋上の枯れた巨大なベンジャミン降るものどもを匿う庵

南洋の風に吹かれていたワタシ

歌島孟

どこまでも逃げ出したくて。うかつにも君を忘れてしまう朝焼け
ゴールデンシャワーの花は降りそそぐ南洋の陽を押し花にして
業深く、連理の枝と呼ばれないままに、クビシメイチジクの木よ
海ほどのジンベエザメの背があれば、サンゴは浅葱色の斑点
おやたちは、夕陽に揺れる海よ、君にさよならをして陸を目指した
祝祭のような暑さに囲まれて、風が私を追い抜いていく
緞帳を何度もめくるように、夜の街灯ならぶ道を歩いた
この空に見えない星のあることを豪州の旗振れば思いき

蝶待つ花

片羽雲雀

私のヒーロー

河岸景都

路地裏に吐いた煙の行先を気にするなんて馬鹿みたいだね
またきみにただ会いたくて会えただけでは物足りなくて塞ぐ
誰からも教わらなかつたからずつとそれしか知らぬ音階の恋
眉顔がもつと欲しいとねだつたら夜を足止めしてくれないか
砂時計のこり少なくなつてから臆病になる欲張りになる
覚悟などしなくてもいい新しい頁をめくるその手で弾いて
酔うほどに甘く揺ぐる声の羽CD-Rでは聴けぬ音
先がない（そんなことない）散るまでは（枯れた後でも）国色天香

平日の喫茶店

涸れ井戸

声の毛布

きまぐれおゆき

喧噪のエアポケットの居酒屋で偏食の友と飲む酎ハイ
厄介な病気の話縁遠い具体名からじむ妖しさ
あと一人集い三人平日の午後も紀伊国屋はボロ混みで
十月はまだ夏のよう満席の三件目の純喫茶でへたる
世渡りのうまい層とは永久に渡り合えそうにない始祖鳥
ルービックキューブのようにうまいことボックス席が空いて一息
俳壇のヒエラルキーの現況を長々語りながらプリンも
「もう少し涼しくなれば再会を」約し阪急電車で帰る

君からの糸のふるえを待ちながら秒のさざなみ返りつづける
網の目にくわれ鱗が触れあった魚のようにきみと出会った
いろいろなものに落ちてくきみからの声の毛布につつまれながら
ぬくもりもぶつきらぼうな告白もひび割れごしのキー・パッドのなか
文字列で逢瀬をかさねるたしかさよすべてのきみは〇と1の雨
指先で上下左右を迷いながらしたためてゆくきみへのココロ
きみからのメッセージが来てはわがこころスマホに余熱を生めり
きみからのメッセージが来てはわがこころ撫で愛される指のおなかで

目を閉じてなお降り注ぐ光から理由を探す毎日が来る
指切りは大人になるほどしなくなつてこれほどに言葉は氷の重さ
パレードは死者のためにもあることを信じて遺作を再生している
また開けるジョハリの窓に佇んでいるわたくしに会うための曲

人間も心臓がある 魔王のまま地上を去つた櫻井敦司

夜の海の暗さも深さも冷たさも知つてゐる声が歌う愛だつた
目を閉じて眠りに落ちる瞬に触れる死を死ぬまで繰り返す
降り注ぐ光が連れてくる朝にまだ立つていてまだ立つてゐる

将棋駒～菱湖書～

香子

宝石やブランドバッグや腕時計それより望むは我だけの駒
運命の人には会つた気がしたの 菱湖の曲線、愛撫のようで
焦がれても手にすることはできないと諦めし駒いま我が元へ
若き日は鉄馬オートバイに恋してた 今は木片の馬を愛する
「所有者が私なんかごめんね」と「一緒に歳を取らうね」を交互に語りかける夜
この駒で最初に並べるべき棋譜は吾を導きし棋士の勝局
彩りを深める虎斑ヒラフに相応しき姿を求め指し続けていく
いつの日か私の駒かぶは朽ちるけど駒よ、その美を留めていてね

夏季休暇

桜さくら

靴

熱烈な積乱雲は去りゆきぬおそい休暇の湯宿をさがす
制服を脱ぎたる腕の軽やかさ動物園を抱えこめそう
ゆく夜の流れは絶えずビールから鉄板焼きにとどまらなくて
神々の逢瀬をかくす雲立ちぬスマホをむける富士の頂き
よーじやの顔パフエいいね、ときおりは映える写真を日記にはさむ
人波の古都の景色を抜けだして青の列車で丹後の海へ
光とも影とも思う休暇なり空を眺める国に暮らして
コロコロとトランクひいて秋の陽の溜まりたる住み家にかえりつく

音楽

澤田悠生

ロータリー

西鎮

prelude 零れて鳴らす黒鍵はビル・エヴァンスの人生の色
調律のとれた楽器で作られた完璧な曲しか知らない僕ら

洋樂しか聴かない君の車でどこに行つてもおんなじ景色
笑顔は絶えるかもしれないが音楽は絶えない家庭にしよう

旋律が君の頭を占拠するドドソララソファアミミレード
抱きしめてあばらの音が出るほどに壊れた楽器は二度とならない
蓄音機流れる声は君の物だけどそこには心がなかつた

背中からトランペットに射抜かれて永遠に孤独を搔き消す響き

秋が来たひとりぼっちの秋が来た並木道には月が咲くなり
秋が来た優しく包む悲しみは昨日吹いた木枯らしのよう
秋が来たそして貴方もやつてきた出逢えたことを心ゆく迄

秋が来たふたりぼっちの秋が来た涼しい日々が続けばいいさ
秋が来た貴方が遠くなつてゆく手を広げても届かない月

秋が来た少しづつだがすれ違うそれでも願うお互いのこと
秋が来たひとりぼっちの秋が来た結局僕はひとりきりだね
秋が来た貴方が遠くなつてゆく手を広げても届かない月

なにもいない

くろだたけし

のぼつたらおりる階段生活の基準は高いところではない
五十年ここに存在し続けて窓の開け閉めにもこつがある
物置きはいくらか人をだめにして刈り込みバサミばかり四つも
あげた人ももらつた人もいなくなり贈り物だけ消えずに残る
境界を越えて芝生が伸びてゆく別に未来があるわけじゃなく
めずらしく蛇を見たのでこれまでどこかに蛇はい続けたのだ
誰もいない二階になにかいるようで二階に行けば一階にいる
壁にふれるまで手を伸ばす暗闇になにもいないという前提で

夏季休暇

さんそ

噂ではお試しだけで背を向ける人の視線に囚われた午後
触れられて持ち上げられて試されて君のかたちに補正されにく
飽和する量産型は慣れてない 指でも名でも差されることを
雨の日に出かけた事が無い君は虹を見たことが無いと言つた
近づくと見えないものが増えていく 踏み切る横の水溜りとか
汚れとか擦れた傷とかにおいとか全部共有してきたデータ
馴染ませて育てたからだ、保たなくてごめん。しょんぼりさせてごめんね。
ありがとう 見つけてくれてありがとう、共に歩けてしあわせでした

音楽

澤田悠生

ロータリー

西鎮

紅筆をくちびるにあて塗つていく気持ちを秋に変えていく色

ボルドーのワインじやなくてボルドーのセーター買おうZARAのセールで
鞄箱にブーツとともに眠つてた去年のイチョウ 枯れた思い出

思い出を始めていける服を着るエキストラでも主人公でも
秋好む心にじむあかね色長いソワレの幕はひそかに

柿色のワンピース着たシルエットだけを残して暮れる宵空
閉じていた本のページにまた今年一番紅いモミジをはさむ
深まつていく色彩に気づいたら転がり落ちて見渡せば秋

十月の空

寿司村マイク

キツネ目の八田與一の横にあるギャンブル依存ケアのポスター
近づいたおじさんにそつと耳打ちし未来を創造する箱男
休日の競馬場でみるおじさんの格好をして場内に俺
赤ペンは売っていないが赤ペンを周りのおじさんたちが持つてて
締め切りを知らすチャイムがだんだんと速度を上げて騒ぎだす午後
(十五時四〇分) 全速で秋空を抜けただ坂とルメールそして息だけがある
たわみゆくフェンスの格子は直線へ俺の重さをやや傾けた
場内に血圧計は設置され行き交う床に散る菊花賞

メルカトル國法の世界大陸が地球の肺に見えて怖い日

見たんだよエレベーターを共にした蚊が後ろから付いてくるのを
これまでは気にも留めない木漏れ日がしくじった日は集まつてくる
今日もまた眩しい面を被つて反対側のプラットホーム

エイリアンみたいな蘭に睨まれておけいはんから京都に入る
フェンスから外に乗り出す植物が開花した手を差し伸べている
内臓の如きサックス煌めいて聴衆たちのストーンヘンジ

日常が非日常にのみこまれ心が爬虫類の目を開く
見きましよう都会さびし野呵責の野ハロウィン過ぎてもひとり魔女めく

隙だうけの叙情

たえなかすず

会えるかな、十年後にも ハロウィンの仮装のままで手を伸べたひと
病むまでの一年ほどはめぐるめく短し愛の一撃激し
水晶 彼女のいつもうそ寒い顔の善人ぶりがうれしい
死んでゆく演技はひとつ 雨の日と冬はいつそう磨きをかけて
来月も会おうビジネスホテル風ラブホで懺悔を終えて笑顔で
正式に宣告されていないのでまだ別離とは思えないんですう
低音部がきれいよねつてさよならを告げたあなたの声を評して
往きましよう都会さびし野呵責の野ハロウィン過ぎてもひとり魔女めく

デスペレートな夜に

多香子

ソルフェージュ

狸やら狐が武将に化けたのか緑だ赤だと平和な合戦
古本の匂いも嗅がずアマゾンの本の密林彷徨するのみ
たそがれにあなたの手相なぞりつつ明日の不安打ち消している
月見草明日の私が怖いから月よりの使者を待ちわびても無駄
唇は冷たい風を呼んでいる 小雀さむいか私もさむい
こんなにも金の鳥降る並木道 足ふみしめて通勤の朝
秋の日のつるべ落としは焼き芋がほっこり恋しい背中が寒い
夕焼けに君がラッパを吹いている ああ默示録の夜明けが近い

なんでもない

千原こはぎ

小林

中村成志

ふかくふかくひと雨ごとに冷えてゆくあなたは秋に生まれたせいでき
できるだけ惰性にならないよう生きる違うためだけにある毎日も
ひとりだけまだ夏にいて焦がれてて 十月、二十八度の真昼
ひまわりはもうしなだれてしまつすぐにきみを見つめることができない
大声で呼んでも届くことのない雨音だけが満ちる明け方
でもそんなうまくいかないやめること諦めることさよならのこと
オレンジに落ちていく空きみはもうわたしのにならないと決めたね
約束のないまま秋を冬を春をなんでもない顔で歩いていく

撫子へ乗り伏す鬼の色として野分ののちはるか朝焼け
見上げれば今日も空氣があるはずで肺が膨らみ喉がすぼまる
沢沿いも落ち葉に埋まりはみ出せと言わんばかりのセンターライン
川向こうのサイドスローの小林が石届ける虹をまぶして
蜜柑ひとつ沖へ向かえば幾千の白を散らして今、相模灘
野菜サラダに肉の脂をかけまわす秋の日暮れが星に震える
白金色の梨を生姜で煮る宵の何年ぶりかの手紙に封を

月のない夜にあなたが置いてくるそのレイアップシユートうつくし
スプーンを入れれば月じやなくなつて夜のわたしをゆるしてプリン
月までの夜をゆくとき足音はふたりでつくる組曲になる
あれは月、おでこには雨。こんなこと話せばきみはわらつてくれる
どこまでも追いかけてくる月だつて逃げたいときもあるのだろうに
類想の森を抜けると明るみにことばを知らぬ月が出ていた
月面にふれたS L I Mは橄欖のいろをわれらに報せてねむる
(ミスリルの月があかるい) 指輪から指をはずしてわたしに戻す

特別でないもの同士の

薄荷。

照らされた道行きなずむ特別でないもの同士の犬とわたしと
じやがいもをマッシュするとき何ものか知らない気持ちも押し潰している
包み紙しづかにはがしてチョコレート知らない国のかがきこえる
車窓から眺める景色は明るくて街の切れ目に咲いたコスモス
号泣の形の文字が並んでいる書簡を読みに行く博物館
ブロンズのカラスの像のくちばしの先にとまっている赤どんぼ
秋風を吸い込んでいる気管支はきつとセピアの色をしている
行き先を示す真つ赤な矢印を指で辿れば遠い夕焼け

自由律の歌

ひなお

夕焼けが海を染める 足跡は砂浜に残り波の音が耳に響く
散歩へ出たいが止めたらと女房が言う 確かに日差しは強い
飛んできた蟬が止まりそこねて飛び去つて行つた 電柱が残る
雨が止んで晴天 散歩に出ると朝から蟬がうるさい
テレビで見たゆで卵の作り方を試す我ながら上手い 毎日作る
女房が出かけていった 昼はカップヌードルいや酒にしよう
ベランダに蟬が転がつている 小突いたら慌てて飛んでいつた
七十五か砂時計の砂があと僅かなのが目に見える

ステイグマ

福山桃歌

ドライブに連れてつて

まさけ

乱暴に愛をぶつけたときにしかざわれなかつた感情だつた
なんでかな大事にしたいと思うのに剥がれて落ちる鱗がきれい
針のような雨に刺されて血が滲むまでもないのに痛みだけある
がらんどう(わたしのための救いなど世界のどこにもないという意味)
届かない祈り 聞こえない声 受け取られない愛 世界は溶けて
はりばで埋めたらきっと満たされてその程度しかない深みだろう
傷ついたことだけこんな鮮やかに何かの模様みたいに残つて
今までの呼吸の数だけキスをするこれがわたしの産声になる

赤く実る

本条恵

玉の緒

松本直哉

「買いませんか?りんご」と舌をかけられる四つ辻 おそらくいけないりんご
人だけが罪を犯せる 見慣れない車の荷台に罪無きりんご
花の季には名を知っている木々だつたはずの裸木しづかに並ぶ
さりさりと削られてゆくものはなに 落ち葉を踏めば秋の夕さり
赤い実が次々実る木のようにまた指先に傷ができる
喫茶店の木のテーブルの年輪のその真ん中に置くカプチーノ
常夏の国の木々にはないといふ年輪 これは冬を知る木だ
木の梁に貼り付けられたルーターはことばを吸つて吐いては光る

サボテンも上手に育てられなくて正しさだけの世界はまぶしい
「対処法/サボテン/腐る」検索をしてみるけれど神様はいない
棘のある言葉に幾つ傷ついて来たんだろうねあなたとわたし
ふたりとも間違いだらけ マニュアルがあれば上手に育ったのかな
愛情を与えすぎてもダメなこと教えて散つたふたりのサボテン
神様の箱庭で生きる毎日にまた凝りもせず君を育てる

触れるものすべてが

ハズキルーペになるミダス王

御糸さち

罰よりラブ

南の島

ドローンで見てみたい自分のつむじ 雨上がりくらいに光つて

モンゴルの子はトナカイで学校へ私は夢で銀行へゆく

あじさわうハズキルーペのボスターの館ひろし史上最大の笑み

触れるものすべてが何になつたなら幸せだつたらうミダス王

理不尽に理不尽で立ち向かうときはそれはそれとして傷はついてる

残照だ それをそれだと確かめる隙に世界をくるむ暗闇

人間は花ではなくて花器だからどんな花でも咲かせられるよ

「この短歌ぜつたい私のことだよね」子に探られて冬の入り口

午前零時の Red or Black ～『死の舞踏』より～

深影コトハ

一輪の花をナイフに見立てれば縦に裂けゆく満月だつた

死神が鎌を構えているように二つの針が重なる時刻

踝の骨を削つた賽子を転がし転がされて奈落まで

強すぎる酒を煽つてバーストに気付かないまま踊れよもつと

切つ先を廻して決める roulette に脳が軋んでゆく音がする

赤ならば憐みたまえ黒ならば羨みたまえ 平等な死を

消毒を始めるよう地下室へ射し込んでゆく朝の光は

雄鶏が鳴いた気がした 目隠しを外せば宗教画のような街

できますとも

六廻めれう

20241031

森内詩紋

かぶりつく場所に戸惑う厚切りの六法全書みたいなトースト

誰ひとり口をきかないテーブルに食卓塙がかがやきを増す

午後からは晴れると聞いて捨て場所に困つた傘で家を出てきた

髪の毛の乱れをそつと直すとき影のほうでも合わせてくれる

あの人の留守を守つているようなデスクの上の多肉植物

本体にボタンはなくてそのせいで電池を入れるリモコンがある

できますの範囲を広く言いすぎて残業してもできそうにない

いさかつて自席を蹴つて出た人のデスクトップに波紋広がる

蜂蜜は気だてが優しくて

村田一広

火をおくりたい

杜崎アオ

氣ぜわしい夏過ぎてアイスクリームをゆつくり食べる秋の真ん中

おつとりとしてる蜂蜜さかさまになつた瓶でも眠りたるま

扇子のやうに拡げる仕草楽しくてつい求めたる葉書100枚

「煙くてすみません」と焼肉をしてる。ならば仲間に入れてください

無人駅は町中なれど電車発てば静寂に包まれる一時間

猫たくさん飼つてる家だからといって捨て猫が混ざつたらすぐ分かる

あらぬ方見て咲いてゐる薔薇園のあるじ行方不明になつた薔薇

リトグラフで描きしごとくアンドロメダ星雲が窓に迫る秋の夜

ちろ、つ、つ、ゆるむ蛇口を締めなおすわたしは今日もいい人だつた
熱中症けがに個性に肯定感守る令和の大運動会
ただそこに若い命があるだけで世界は美しいかもなんて
「今の子は」ちくりと刺さる職員室罰よりラブで成長したい
自販機とトイレと生徒指導室だけの明かりがついている廊下
かけがえのない経験をしたいのにみんなと違うと不安になるの
なんで捨てないの?映画の半券でまたがんばれるときがあるから

何色になれるかなんてわからない今日を走つていくぼくたちは
あこがれを胸にいだいて手を伸ばす指先でふれた冷たい朝
ふつうにもなれないここにいたくない ひかる朝露踏み出してみて
あやまたず在れたらいいかそれよりもきりひらいて明日を見せて
いつかにはまだまだ遠い一步ずつ進む僕らの足あとに花
だれよりも先ゆくひとよ手を伸ばすとなりに並ぶゆめをみていた
にがすぎた味も違和感もそのうちひとつになつて、同じになつて
結局はだいすきだつて伝えたい透明な薔薇抱く可能性

水也

透明な薔薇

8号車15列Cの席に着き10年ぶりにいざ一人旅

酔い止めを飲もうとしたが茶の蓋が開かない やさしいルイボスなのに
すぐ効くという箱書きに期待して白く小さき1錠を飲む

そういうえば新幹線の車窓から実家が見えるんだつたな、確か

赤、茶色、モーブ、シルバー、黒、黒どれもゴツツイスースケースだ

仙台で乗り込む人の大半が牛タン弁当携えており

前列のヒトよ惜しいな「一首」だよ あと短歌には季語は要らない

福島を過ぎれば次は郡山ここから先はぼくには異郷

まちなかに焚き火の諸島 蓋つきのコーヒーをみな両手でもつて

ひつそりと屋根は閉ざされストリートピアノに冬のけもののはい

入れかわるもちぬしたちをつれだして人より古書は遠い旅する

まぼろしに瘦せさらばえた白猫の路地いつの日もおわりはちかい

少しづつきみにこころを明けわたす栗の渋皮むくようにして

くらがりをおそれることに理由などなかつた胸へ火をおくりたい

白昼夢のような淡いあいさつをかわして町はさだまつてゆく

西風にふるびた弓をききながらおもつた冬のはじまりかたを

「昼」

テーマ詠

昼前に家事をこなせるようになり遅咲きだけど私は伸びる

まひるまのカフェの窓辺にやはらかな冬のひかりと相席になる

この恋を追うのはやめよう 日曜のフードコートで氷を捨てる

昼間から酒を飲むのは日曜日中華料理を楽しむ六日

◆ 有村桔梗
◆ 麻倉ゆえ
◆ 井倉りつ
◆ 石川順一
◆ 入谷聰
◆ 泳二
◆ 宇井モナミ
◆ 宇祖田都子
◆ 歌椎柳
◆ 香椎柳
◆ 沢一
◆ 内藤うく
◆ 千原こはぎ
◆ ともえ夕夏

街路を歩く真夏まひるま蟬の声ひとつもしない真夏まひるま

真昼間に願いひとつも託されず軽やかに飛ぶ白き流星

空中元素固定装置の暴走で高分子吸収体の昼

◆ 有村桔梗
◆ 麻倉ゆえ
◆ 井倉りつ
◆ 石川順一
◆ 入谷聰
◆ 泳二
◆ 宇井モナミ
◆ 宇祖田都子
◆ 歌椎柳
◆ 香椎柳
◆ 沢一
◆ 内藤うく
◆ 千原こはぎ
◆ ともえ夕夏

何もかも熱に溶かされてしまつて僕はあなたを真昼と呼んだ

今だつて真昼の月を見ていたよ失つたきみの鼓動みたいに

長雨の土に祈りのキスひとつまひるを見せよネオ葉緑体

真昼間の暗い雨林へさしそそぐ希望は光のように揺らいで

昼に会うオオミズアオになぞらえて思い出キレイにピンで留めてよ

◆ 涵れ井戸
◆ 河岸景都
◆ 君村類
◆ 久保田毒虫
◆ くうたか湖春
◆ さんそ

居酒屋のランチメニューの定食の有頭海老の刺身に驚喜

◆ 涵れ井戸
◆ 河岸景都

真昼にも星は変わらずあるはずでもっと早くに気付きたかった

◆ 君村類

この恋は昼に浮かんだ月のよう霞んで見えて手に届かない

◆ 久保田毒虫

陽だまりの匂いが肌にうつりそう膝でまどろむ仔犬にふれる

◆ くうたか湖春
◆ さんそ

太陽の白いヴェールに溶けていく流れる星に漕ぎ出す舟も

◆ 西鎮

真夜中のギリシャヨーロプトにからむ昼の記憶は海に似ている

◆ 睡密堂

ほんとうにきれいな時間ほんとうにかなしい時間 午後四時の空

◆ たえなかすず

昼下がりスパイスカレーを食べているあまい言葉の要らない人と

◆ 千原こはぎ

昼下りシエスタからのサボタージュ生きていいか鯖雲に訊く

正しい幸せに満ちた休日の晴れた昼間の公園が好き

テーマ詠 「昼」

チエキは影を上手く表現できなくて真昼間きみの頬がつるりと

引越の段ボールをあしたの恋の方舟として午後に微睡む

二度寝のち昼寝はかどる休日に秋のはるけ天球儀澄む

太陽のかがやく時間すこやかな時間あなたに逢えない時間

身長が少し足りなくて午後二時の書庫の光に手が届かない

太陽の中で昼酒 虚空は優しく私を包む

陽ざしの中で昼酒 虚空は優しく私を包む

昼休み風に吹かれて待つている空を見上げてただ伸びをして

何度でも思い出せるの 夜の熱、明け方の夢、まひるのくちづけ

無いはずの幻ほのかに見せつける真昼の月よ夜の太陽

図書館の帰りに横切る歓楽街の昼寝の顔しか知らない私

昼休み私の抜け殻置いてきて蜜を求めてコンビニを舞う

昼間からビールを呷る父の背が妙に伸びてる 声はかけない

図書館の帰りに横切る歓楽街の昼寝の顔しか知らない私

何度でも思い出せるの 夜の熱、明け方の夢、まひるのくちづけ

無いはずの幻ほのかに見せつける真昼の月よ夜の太陽

わたりどり渡つたあとにまひるまの白磁の水辺より冬はくる

中村成志

夏野ネコ

袴田朱夏

畠依裕

薄荷。

ひなお

平本文

福山桃歌

古井朔

本条恵

真岡まな

まさけ

御糸さち

松浦やも

松本直哉

深影コトハ

みなま

南の島

虫武一俊

みやこまなつ

水也

村田一広

南の島

杜崎アオ

森内詩紋

告知

短歌 ラボラトリ

実験的
短歌
ワークショップ

全6回

すべてご参加いたいでも
興味のある回のみの
ご参加でもOKです

定員
各回 8名

参加費
各回 700円

研究員
牛隆佑
千原こはぎ

会場
JR草津駅近辺
@滋賀

新しい短歌のワークショップがは
じまります。はじめて作る人から日頃短歌を作っている人、ベ
テランさんまで、どなたでもめ
いっぱい楽しめる実験的な短歌
の場を目指します。全6回、きっ
と全部楽しい！ぜひ
と一緒に、短歌でわ
くわくしませんか？

第1回

短歌のマジカルラーニング

小説の書き出しから短歌を作つ
みよう。はじめて作る人にも！

2024年
11/30(土)

対象：はじめて作る人 作ったことある人

第2回

短歌のワンターマテリアルとは

なんでもないところから自分だけ
の詩情を見つけ出せ！

2024年
12/28(土)

対象：はじめて作る人 作ったことある人

第3回

短歌のカラフルバリエーション

短歌の展開がワンパターン？
カギは「接続詞」だ！

2025年
1/25(土)

対象：作ったことある人

ご質問等は、X(旧 Twitter)の牛隆佑(@ushiryu31)、
千原こはぎ(@kohagi_tw)までDMにてお問い合わせください。

主催：千原こはぎ | <https://tankalab.wixsite.com/info>

詳細、お申し込み等は
こちらのサイトから！



一首評

西鎮

審判に渡した金が足りなくて負けても金
は返つてこない

くろだたけし

全体が何らかのメタファーで構成されているよう
一連の、最後の一連。人生における挫折や不安を、
それらの種類ごとに鑑別しているような肌触りがあ
る。この歌では、賄賂と敗北が詠されていて、恐ら
くはスポーツにおけるそれなのだろうが、一連にお
ける他の歌との共鳴を重視すれば、戦争の一面とも
とれるようにも思う。いずれにしても、連作に通底
する自嘲的態度のディティールとそこに残る何とも
言えない不安全感に惹かれた。



一首評

前号の「うたそら」から

気になった一首をとりあげて

200文字くらいで語る

一首評のコーナーです

今年の夏を代表するような一首。
ここ数年、「史上初」が何回繰り返し使用されてき
たか。この言葉をダメ押し風に繰り返すことにより、
もう「語彙」の事さえ構つていられないほどの熱気
であることを強調している。
さらに、「史上初」が間断無く重ねられるとは、こ
の大地が拠ん所ない箇所へ向かっている事も明示し
ている。
ただ二つの読点が、不安さを盛り上げていて。

六廻めれう

史上初、史上初って繰り返す暑さを語る
語彙の少なさ

一首評

入谷聰

まもなく闇、闇ですお出口左側3番のり
ばに到着します

井倉りつ

電車が「闇」という駅に接近する際の車内アナウン
スという形ですね。中澤系（3番線快速電車が通
過します理解できない人は下がつて）を連想しつつ、
お出口左側3番のりば、の選択が妙に心に残りました。
「出口」の先にあるのは、夜闇。主体は「闇」
で下車するのか？他の乗客が闇に降りていくのを傍
観しているのか？急行列車から、闇の近くのどこか
へ向かう各駅停車に接続するのか？そのまま「光」
まで乗車を続けるのか？

一首評

中村成志

「そらよみ」一首評募集

ご投稿はこちらの
投稿フォームから！



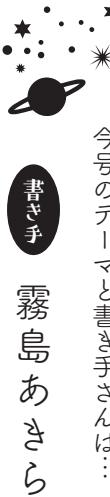
前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、
その歌について200文字以内でお書きください。
お一人につき一首まで。
ご自分の短歌ではなく、他の方の作品をお願いいたします。
公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような
投稿は掲載できませんのでご注意ください。

七望遠鏡

23



短歌にまつわるあれこれについて
自由さままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…



書き手 霧島あきら

テーマ クラシック音楽に
まつわる短歌

親指から順に折り曲げて音を数える。短歌に親しむようになつてからわたしの日常の一部となつた動作だ。自分で詠むときも誰かの歌を読むときも、リズムを確かめるために指を動かす。意識していなくても、頭のなかで数を唱えていると自然に指が動き出す。脳と祖先の運動を感じるとき、高校1年生まで続けていたピアノレッスンの記憶が頭をよぎる。「12345」が「ドレミファソ」にふと変換される瞬間があるのだ。正直あまり熱心な生徒ではなかつたし、いまは一切ピアノに触れることがなく音感も狂つてしまつたが、幼少期からの経験はなんらかの形で身に留まるのだと実感する。

手を広げ人を迎えた思い出のグラードウス・アド・パルナツスマ博士／服部真里子『行け広野へ』

美しく大胆な構成に衝撃を受け、魅了された一首。下の句はまるまる博士の名前であり、ドビュッシーによるピアノ曲のタイトルでもある。こうして詠み込まれると、曲のタイトルと知つてもどんな人物なのか想像せずにいる。微笑ましさの滲む上の句から、やさしげな博士の顔を思い浮かべる。架空の人物だからはつきりと思い描けないのは当たり前なのだが、それを思い出せない自身の遠い記憶のように錯覚する。また、駆け出すような華やぎの曲調も後押しして、作中主体はその人の来訪がうれしいのだと感じられる。それは博士のことだろうか。下の句をあくまで曲名と捉えるかひとりの博士と捉えるかは読者に委ねられていること、この歌の謎めいた魅力に寄与していると思う。

ここからは、わたしの作ったプレイリストの一部をさらにご紹介していく。既にこれらのが歌をご存じの方もいるかも知れないが、詠み込まれている曲を聴きながら改めて鑑賞していただければとてもうれしい。

放課後の窓の茜の中にゐてとろいめらいとまど
るむきみは

／山田航『さよならバグ・ナルドレン』

ショーマン作曲の「トロイメライ」は、夕方のチャイムに採用されている地域もあるだろう。郷愁を誘うゆつたりとしたメロディーは茜色の景色によく似合う。トロイメライはドイツ語で「夢想」を意味するが、ひらがなで表記することにより、とろけるようなまどろみそのものへと変貌する。さらに、窓を隔てた夕焼けに「きみ」が溶け込んでしまったような描写も巧みで、それは作中主体があみの夢のようにも思われる。音の響きと言葉の意味、歌を構成するすべてが調和して、この作品 자체が素晴らしい音楽のようだ。何度も感嘆してしまう一首である。

ドヴォルザークドヴォルザークとじやがいもを

新世界へと掘り起こしたり
(2024年5月20日毎日歌壇 加藤治郎選)

／深海泰史

この世にはさまざまジャンルの音楽が存在し、たとえば童謡や歌謡曲を踏まえた素晴らしい短歌も当然あると思う。そのなかで、わたしがとりわけクラシック曲を題材にした短歌に惹かれるのはなぜだろうか。ピアノに親しんだ経験も影響しているだろうが、主に2つの要素によるところが大きい。それは、①(オペラなどエッセンスにしている歌のこと)である。美しく叙情的であつたり、激しく悲痛であつたり、音楽がもたらす多様なイメージを纏つた短歌は立体的な響きを持つ。その奥行きをうつとりと味わうのが好きだ。そういう短歌を見つけては、プレイリストに加えるようにノートに書き留めている。

歌詞のない音楽を聴いて想像を膨らませると、わたしたちの脳には、その調べや曲が終わってからも続く余韻が夢まぼろしのように曖昧な風景として格納されると感じる。そして、その曲にまつわる短歌を読んで言語化されたイメージに触れるとき、もともと抱いていた印象が再構築され自身のなかからも新たな言語的イメージが生まれる。その瞬間がたまらなく好きだ。また、本来、曲から得た感覚はどちらぞころがないものも多く他者と共有するのは難しいと感じるが、短歌に組み込まれた曲のイメージは輪郭が際立っている。そういう短歌を鑑賞することは、ひとりの歌人の感覚を知ること

こちらも、斬新かつ納得感のあるオノマトペに唸つた。読むと笑みが溢れる一首だ。ドヴォルザークの名前を音楽の教科書で見たときなんとなく強そうな響きだとは感じたが、じやがいも掘りとこんなにマッチするとは。頗もしい掘りっぷりである。ややこじつけかもしれないが、分解してみても、ドは土、ヴァオルは掘る、ザーグはスコップの音に感じられてしつくりくる。牧歌的な光景と重厚で壮大な曲のギャップがおもしろく、交響曲なので大人数で掘つているようにも思う。「新世界より」はアメリカ滞在中に故郷のボヘミアに向けて作曲したと言われるが、じやがいもは地上に辿り着きどんな感想をもつただろう。

つづいて、演奏している情景を詠んだ2首を。

踏み抜いていますぐここへ落ちてきて雨の夜に
弾くラ・カンパネラ
(2023年3月20日毎日歌壇 加藤治郎選)

最後に自作を。みんなさんの短歌もぜひ読ませていただきたい。

夜想曲 東の果てで星を撒くあなたの密やかな
指づかい
／霧島あきら

リストの名曲で「鐘」を意味する「ラ・カンパネラ」。激情を湛えつつもそれを押し殺すようなピアノが「いますぐここへ落ちてきて」という切実な思いと響き合う。ピアノを弾いて天ほど遠い場所にいる相手に音を届ける。それは弔いの鐘のようでもあるが、踏み抜くことを導くさまが痛ましくも美しく、胸を打たれる。この歌と出会つてからというものの「ラ・カンパネラ」の物悲しい旋律が打ち付ける雨に聞こえる。描かれた情景があまりにも鮮烈に曲と結びつき、



Twitter(現X)
ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」ではTwitter(現X)でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

第24号

連作欄 8首の連作自由詠
テーマ詠欄 「朝」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集



第24号 メモリ 24 12/31(火) 24時

・8首の連作自由詠 ・テーマ詠「朝」1首

第25号 メモリ 25 2/28(金) 24時

・8首の連作自由詠 ・テーマ詠「4」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

やつと少し秋らしくなってきた今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。夜に半袖パンでいるとすっかり寒くなってしまって、慌てて長袖パジャマを引っ張り出します。美術館や博物館、公園や植物園など、いろいろなところにお出かけしたくなる時期ですね。皆さんにとって、楽しいことがいっぱいの秋となりますように。

今号もたくさんの作品をお寄せいただきました。じっくりゆっくり楽しんでいただければ幸いです。

次号は、大晦日メモリの年明け発行、テーマ詠のお題は「朝」です。新しい年の始まりに、すてきな作品をお待ちしております。

今号のうたそら

第23号

参加歌人様 58名

連作欄 42名

テーマ詠欄 48名

一首評 3名

コラム 霧島あきらさん

エッセイ 福山ろかさん

ご寄稿いただき
ありがとうございました!

illustration: kohagi chihara

パークリングエリアの風になればずの旧姓を思い出しそうになる

福山ろか

ヤシの木で思い出すのは、去年の二月に訪れた宮崎県の日南だ。高三の終わりの春休み、優秀賞に選ばれた若山牧水青春短歌大賞の授賞式に出席するために一人で宮崎県を訪れた。それがすごいのが、往復の飛行機代や電車代、そして宿泊費をすべて主催の延岡市が負担してくれるということだ。さらに、優秀賞は二万円の旅行券がもらえる。全学生は若山牧水青春短歌大賞に応募してみたらいと思う。そういうわけで、実質無料で、というか旅行券をもらえたのもしかしたらプラスで、宮崎を満喫させてもらった。

来事がある。授賞式中の選者が受賞者と少し言葉を交わす時間に、選者が一人の小学生に「これはどういう場面で作った?」と聞いていた。それでその子が、「学校の宿題で短歌をつくるというのがあって、学童でやつてたときに先生が考へてくれた」という感じのことを答えて、会場はなかなかに静まった。その空気感。おっとと私は思いつつ、まあまあその場は次に進んだのだけど、今までで覚えているなかではかなり戦慄した瞬間だった。

というのはいいとして(?)、授賞式や懇親会ではいろいろな歌人の方とお話しさせていただいた。わたしはその数か月前に角川短歌賞で「さ

カレー、釣り、日南フェニックスロード、宇都神宮などに連れて行ってもらつた。ヤシの木はヤシの木っぽいものが多くてどれが本当のヤシなのかよくわかつてないけれど、一応日南のドライブロードにあつたのはヤシで合つているらしい。短歌は、宮崎を旅行しているときに作った一首。

翌日には雨月茄子春さんに車で青島、スープえづくりに気づく」という連作で次席になつたのだが、大学生部門で受賞されていた久永草太さんに「さえずりに気づかれた福山さんですか?笑」と声をかけていたり、伊藤一彦さんが「君があの連作の福山くんか」と知つてくださつていてとても光榮だつたりした。お二方とお話をできたこと……と言いたいところだけど、それ以上になかなかインパクトのあつた出来事がある。授賞式中の選者が受賞者と少し言葉を交わす時間に、選者が一人の小学生に「これはどういう場面で作った?」と聞いていた。それでその子が、「学校の宿題で短歌をつくるというのがあって、学童でやつてたときに先生が考へてくれた」という感じのことを答えて、会場はなかなかに静まった。その空気感。おっとと私は思いつつ、まあまあその場は次に進んだのだけど、今までで覚えているなかではかなり戦慄した瞬間だった。

えづくりに気づく」という連作で次席になつたのだが、大学生部門で受賞されていた久永草太さんに「さえずりに気づかれた福山さんですか?笑」と声をかけていたり、伊藤一彦さんが「君があの連作の福山くんか」と知つてくださつていてとても光榮だつたりした。お二方とお話をできたこと……と言いたいところだけど、それ以上になかなかインパクトのあつた出来事がある。授賞式中の選者が受賞者と少し言葉を交わす時間に、選者が一人の小学生に「これはどういう場面で作った?」と聞いていた。それでその子が、「学校の宿題で短歌をつくるというのがあって、学童でやつてたときに先生が考へてくれた」という感じのことを答えて、会場はなかなかに静まった。その空気感。おっとと私は思いつつ、まあまあその場は次に進んだのだけど、今までで覚えているなかではかなり戦慄した瞬間だった。

えづくりに気づく」という連作で次席になつたのだが、大学生部門で受賞されていた久永草太さんに「さえずりに気づかれた福山さんですか?笑」と声をかけていたり、伊藤一彦さんが「君があの連作の福山くんか」と知つてくださつていてとても光榮だつたりした。お二方とお話をできたこと……と言いたいところだけど、それ以上になかなかインパクトのあつた出来事がある。授賞式中の選者が受賞者と少し言葉を交わす時間に、選者が一人の小学生に「これはどういう場面で作った?」と聞いていた。それでその子が、「学校の宿題で短歌をつくると

23
リレーエッセイ
いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

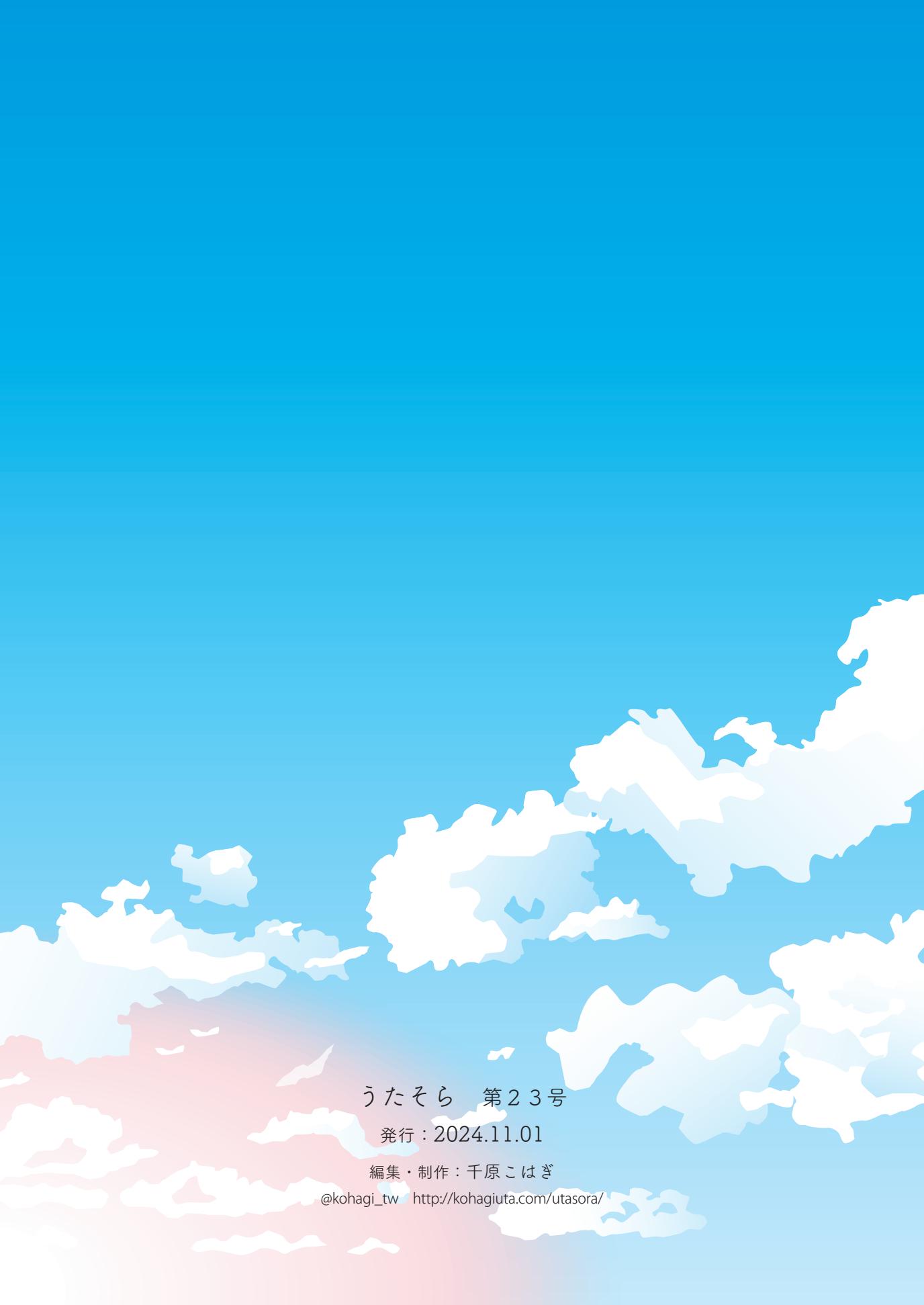
椰子
福山ろか

着いてすぐ授賞式で、ホテルにチェックインしたあと大学の入学式用に買ったスーツを着て会場へ向かった。今フォルダを見返していたらホテルの部屋でスーツを着ている自撮りがあつて、ネクタイをちゃんとできているのか確認していた形跡がある。こう見ると今より若干幼くて、一年半で顔つてまあまあ変わったんだと思う。

授賞式で印象に残つたのは、いろんな歌人の方とお話をできたこと……と言いたいところだけど、それ以上になかなかインパクトのあつた出

人はそれからもご連絡をくださつたりして、「三世代のいちごつみ」といういちごつみ企画にもゲストとして呼んでいただいた。ありがたいご縁だなあとつくづく思う。

翌日には雨月茄子春さんに車で青島、スープえづくりに気づく」という連作で次席になつたのだが、大学生部門で受賞されていた久永草太さんに「さえずりに気づかれた福山さんですか?笑」と声をかけていたり、伊藤一彦さんが「君があの連作の福山くんか」と知つてくださつていてとても光榮だつたりした。お二方とお話をできたこと……と言いたいところだけど、それ以上になかなかインパクトのあつた出来事がある。授賞式中の選者が受賞者と少し言葉を交わす時間に、選者が一人の小学生に「これはどういう場面で作った?」と聞いていた。それでその子が、「学校の宿題で短歌をつくると



うたそら 第23号

発行：2024.11.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>